



# 大阪のイザヤ

## 御言葉の自由（御言葉が主であること）と預言者的体験

### 今日と預言者

最初に紹介されている、ルターの福音理解が実に多くのことを物語っていることからはじめなければ成らない。その最初は、「聖書自体は変わってはいないということである」<sup>1</sup>。それがラテン語で書かれたものであろうと、世界の反対に位置する国の日本語でかかれたものであろうと、ここで、「預言者の言葉（原テキスト）の翻訳」ということに、留意しなければならないとしても、同じであらう<sup>2</sup>。変わったのは、時代に生きる、信仰者である。キリストのみにおける、三つの「のみ」における、「形式原則」として説明されていることである。

ところがこの「聖書のみという形式」が、それにはとどまらず、「歴史的文法的意味を見出すことは、同時に、キリストを見出し、福音を知らせることであった」という実質にまで成長していった、かっとうが説明されている。

続いて、敬虔主義の時代を経、近代批評学の混乱と、行き詰まりについて解説されている。ここにも書かれているように、ポストモダンの立場による打開の時代を迎えているわけであるが、このポストモダンという言葉の意味もいまだ曖昧である。

そこで、

1：発見と言うことと、新しい意味を付け加えるとか発明と言うこととは、異なるということ。

2：我々は、我々の時代に生きているということ。

3：そして、キリストにあって、信仰において理解され体験されなければならない。

と言うことから、イザヤ6章について、同じく理解してみたい。

1：

このことについて、(1)(旧約聖書の)全体性、(2)(それぞれの個所が)「主題的」解釈されると言うこと、(3)(繰り返され渦巻状に成長してゆく)「循環性」に関する理解。(4)不確定性と、積極的にそれを体験しようとする「開放性」(5)今我々が読み、体験しているのだという「共時性」の面から、ポストモダニズムに聖書解釈について、考察を勧めている。

これらの視点の大切さは、もっと現実的には、今の教会にも、何を告白し、何を大切にし、宣教についてどのように理解するのかと言う意味においても重要である。すなわち、今我々は何をしているのか、教会と日常において理解できる批判力を持つということである<sup>3</sup>。と言う意味からも大切である。

2：

この視点は、共時性、全体性という視点から大切である。我々が、隠れたる仮面の神<sup>4</sup>の歴史を追い、キリストの本質の何であるかよりもはるかに勝って、「キリストが我々のために何を成したもたかを喜ぶ(ルター)」なら、預言者の言葉を、今の社会にあって、理解しなければならない。日本語と聖書テキストの単語は

1対1には、残念ながらなっていないし、文法も異なる。

上田光正は、まず最初に次の問題を掲げている。それは、「聖書の神言性」、「聖書の人間性」がそれである<sup>5</sup>。

3:

「恵みのみ」ということをルターは示された。しかしこのことは、十字架を通して、旧約聖書が「神の義は、福音において啓示される」という全体性において成り立つことである。聖なる裁きの神に直面する場合もあるし、恩恵のみだからといって、たとえば士師記の一部分から、主の贖罪のみ業を発見できなくても、曖昧な部分を過度に軽視して、感覚にゆだねることにはならない<sup>6</sup>。イザヤの召命の記事は、パウロと同じような、主権者メシヤとの出会いなのである。

項目に分けて違うところをまとめると次のように成る。

	(使徒行伝)	(イザヤ書)
前提	抑圧者・迫害者 9:1	けがれた唇の者 6:5
出来事	復活の主との出会い 9:17	神との出会い 6:1、5
	(人) 弟子アナニヤ 9:10	(聖なる) セラフィム 6:2
	光によって地に倒れる 9:4	罪は許された 6:7
声	私が選んだ器 9:17	誰を遣わすべきか 6:8
著者	ルカ	イザヤ自身
	その他 . . . . .	

これらのことを拾い集めて記述していくのは、そこに時間の差を感じさせないほど、楽しいことでもあり、自身の、受洗の思い出とも重なることである---現在に及ぶ---。その反面の神、これはデータから、一群のインフォメーションを作成する作業で、「割愛」を含むことも意味しているし、欠落しているところを、理解や発見を持って時代的に補うことも意味している。その代表が、バルバ口訳などに出てくる、聖書の絵である。はっきりするけれども、開放性を損なう。

この歴史のヒーローに対する讃美の歌についてみてみることにする。

LXT Isaiah 6:3 kai. ekekragon eferoj proj ton eferon kai. elegon agioj agioj agioj kurioj sabawq plhrhj paša h`gh/ thj doxhj autou/

BLM Isaiah 6:3 kai. kai,cc ekekragon krazw viaa3p eferoj eferoj ainmsn proj proj pa ton o`dams eferon eferoj aiamsn kai. kai,cc elegon legw viaa3p agioj agioj annmsn agioj agioj annmsn agioj agioj annmsn kurioj kurioj nnmsc sabawq sabawq ng--c plhrhj plhrhj annmsn paša paj ainfsn h`o`dnfs gh/gh/nnfsc thj o`dgfs doxhj doxa ngfsc autou/autoj rpgms

この agioj は、聖書全体を貫いて幾度も表れる、声になった言葉である。黙示録 4:8 における讃美の異文には、8回の繰り返しも見られる (a\*,そのた)。

al fn tAabc. hwhy>vAdq' vAdq' vAdq' rma'whz<l a, hz<arq'w B H S Isaiah 6:3

qal perf- waw 3masc

adjective

preposition

plural absolute adjective

qal waw single

`AdAbK. #rah-'lk'

single abso const-

そして、互いに呼び交わして  
 そして言った  
 聖なるかな聖なるかな聖なるかな  
 満たしなる力なる主、 栄光(が)全地(に)

互いに呼び交わして言った。「聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」。

(@vqq3ms+SxxxJxCxExHaRx)arq (@Pc+SxxxExHxRx)W Isaiah 6:3

(@amsa+SxxxExHxRx)hZ< (@Pp+SxxxExHxRx)l a, (@amsa+SxxxExHxRx)hZ<

(@vqq3ms+SxxxJxCxExHaRx)IIMa (@Pc+SxxxExHxRx)W

(@amsa+SxxxExHxRx)vAdq' (@amsa+SxxxExHxRx)vAdq'

(@ncbpa+SxxxExHxRx)abc' (@np--a+SxxxExHxRx)hwhy (@amsa+SxxxExHxRx)vAdq'

(@Pa+SxxxExHxRx)h (@ncmsc+SxxxExHxRx)l K0 (@ncmsa+SxxxExHxRx)al in

(@ncmsc+S3msExHxRx)dAbK' (@ncbsa+SxxxExHxRx)#ra,

これは、おそらくはイザヤが聞いた思い出であるから、預言者の言葉の要因であり力であった。もっとも大切なのは、イザヤ自身の、恐れと緊張であり、へりくだってこれからの召しに備えることにある。

神を見たものは死ぬと言うことと、神を見ると言うことは同時に真実であり、イザヤも、神の様子についての記述はしていない<sup>1</sup>。また、言っていないことを、「明らかでない部分をも含めて、神の啓示の事実」(ルター)としてこの事実、我々が直面することが大切なのである。

ルカ 2:14 には、共鳴するイメージが記されている。「いと高きところは、神の御坐をイザヤにおいて示し」などという説明は、多く可能であろうがそれよりも、共時性と、循環性において大切なのであって、「主の栄光に非常に恐れた羊飼いが」、「告げ知らされたことを、人々に知らせた」羊飼いの出来事のほうがるかに大切なのである。

ポストモダンと言う規定には、「価値の多様化・乱立」という側面もあり、また等しい位置も持っているように見える。しかし聖書は変わっていない。変わっているのは、「御言葉のみが成る」そして、文化的には変化する、時代との間の、開放性や、共時性に関わっての掛け橋であろう。そして結論は、モダニズムの意味と言うことは、築いたけれども、新しい尺度があつてのことではないということである。歴史的時間を待たなければならないという理解にも到達する。ひたすら問い続けることが可能なのであろう。

<sup>1</sup> ここに釈義が存在する。「今日におけるよい訳」も存在する。行うものと言うよりは、迫られるものなのである。O.H.シュテック、『旧約聖書釈義入門』などの整然とした、釈義的方法を、仮にこのような書き方がその当時なかったにせよ、ルターの好まなかったことのように思われる。

<sup>2</sup> Greek NT Romans 1:17 dikaiosunh gar qeou/en autw/apokaluptetai ek pistewj ej pistin( kaqwj gegraptai(-0 de dikaiow nou ek pistewj zhsetai. という異文がある(C\*)。「信仰による義人は生きる」と理解できないことも

ない。ハバクク書にある、

「・・・・・・正しいものはその誠によって生きる。」としたのがバルバロ訳である。

「正しい者は信仰によって生きる」（新共同訳）。これに対して

「信仰によって神の前に義しいとされた者は、生命を見出すであろう」（柳生訳）となっている。問題は、コンテキストに関わる問題となっているのである。ルターの見解の基礎にもなっているのである。

hxyI AtWnaB, qyDcywAB Avpn hr'vy"al {hl P.[uhNiBHS Habakkuk 2:4

(@vup3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)lp[ (@Pi+SxxxExHxRx)hNi WTM Habakkuk 2:4

(@ncfsc+S3msExHxRx)vpiK (@vqp3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)r'vy (@Pn+SxxxExHxRx)al {

(@amsa+SxxxExHxRx)qyDc; (@Pc+SxxxExHxRx)W (@Pp+S3msExHxRx)B

(@ncfsc+S3msExHxRx)hrWna/ (@Pp+SxxxExHxRx)B

(@vqi3ms+SxxxJxCxAxExHxRx)hyx

hxyI AtWnaB, qyDcywAB Avpn hr'vy"al {hl P.[uhNiWTT Habakkuk 2:4

(@vup3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)lp[ (@Pi+SxxxExHxRx)hNi WTM Habakkuk 2:4

(@ncfsc+S3msExHxRx)vpiK (@vqp3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)r'vy (@Pn+SxxxExHxRx)al {

(@amsa+SxxxExHxRx)qyDc; (@Pc+SxxxExHxRx)W (@Pp+S3msExHxRx)B

(@ncfsc+S3msExHxRx)hrWna/ (@Pp+SxxxExHxRx)B

(@vqi3ms+SxxxJxCxAxExHxRx)hyx

hxyI AtWnaB, qyDcywAB Avpn hr'vy"al {hl P.[uhNi Habakkuk 2:4

(@vup3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)lp[ (@Pi+SxxxExHxRx)hNi Habakkuk 2:4

(@ncfsc+S3msExHxRx)vpiK (@vqp3fs+SxxxJxCxAxExHxRx)r'vy (@Pn+SxxxExHxRx)al {

(@amsa+SxxxExHxRx)qyDc; (@Pc+SxxxExHxRx)W (@Pp+S3msExHxRx)B

(@ncfsc+S3msExHxRx)hrWra/ (@Pp+SxxxExHxRx)B

(@vqi3ms+SxxxJxCxExHxRx)hyx

は、こちらのほうに近いかもしれない。

いずれにしろ、聖書は変わっていない、ということである。理解する方が変わっているのである。

この二通りの可能な訳について、見てみると、こうなるだから、釈義が必要になるのである。こう言われている、という説教は、ここでは不可能になることになる。なぜなら、翻訳が違うことがあるのだから。

聖書協会訳は、両方とも、「信仰による義人は生きる」という訳である。けれども本来は、ハバククが「義人は信仰によって生きる」、すなわち、律法を忠実に守る義人は、その律法を守る時の、神に対する信仰によって、神に生かされる、と解釈するのです。とすれば、パウロがそれをイエス・キリストを信じる信仰（のみ）によって、神に生かされる、命を与えられる、と解釈し直したことになる。しかも、その考えが当時のユダヤ教の主流ではなかった、と言う点も重要である。なぜなら律法を遵守することによる信仰ではないことから明らかである。ここには、パウロの、「自分自らはユダヤ人なのに、異邦人にも信仰を抱いてほしい」との信仰が告白されているのである。

ところが、「正しい者は、信仰によって生きる」との解釈をとるとすれば、すなわち、ハバククの解釈を、パウロは、継承し、彼もユダヤ教の中に生きている、との立場なのですが。しかし、おそらく確かにパウロは、ハバククをその意図において正しく引用したけれども、そうする中で、パウロ独自の解釈を付加している。

すなわち、イエス・キリストに義とされる体験をもつ者は、その信仰による実存体験によって、イエスの十字架と復活による救いの体験によって（「のみの信仰」）生きることを可能とされる、ということになるようである。なぜならユダヤ教には、「イエス＝メシア」、「イエスは主であると言う告白」は出てこないのだから、こうしたことは存在しない。

「おもいぐらす」という域を出るものではないけれども、パウロの、「ユダヤ人を得るためには・・・」という理解のために、ハバククの意図に反して訳をアレンジしている、とも言えるのである。

ルターがこのことを知らなかったとは思えない（書かなかったにしても）そこにルターの苦しみの中からの「発見」があるのかもしれない（ウイスロフ、『マルティン・ルターの神学』、「ルターによってもたらされた新しいもの」、よりの、単なる「イメージ」であるから、このことは、今日プロテスタント教会の多くが、告白していることに何らかの関係があるということとは関係はない。ただ、「福音の内に啓示されている」と言うこと、をふくめ、神の義は変わらないという、理解だけは、前提にしているので、聖書全体は、ルターを支持するであろう）。

<sup>3</sup> ……。教会の典礼を、もし全体として破壊するまいと願えば、そのいろいろの機能のうち、どの一つも無くて良いということはない。そしてこの神学という機能こそ一己の基礎・根源に対する教会のこの批判的自覚こそ、いかにしても欠き得ぬものだとすることを、断乎として語るのは、今日適切なことである。理論なしに、ただ実践してみるが良い。知的な活動や認識や信仰告白は犠牲にして、ただ生活だけを讚美してみるが良い。真理は軽視して、ただ現実を崇めてみるが良い。そのような実践も、実際にはやはり全体ではなく、やはり人間的な業であって、しかもその自己中心的な孤立のゆえに、疑いなく良き人間的な業でもないということが、たちまち明らかになるであろう。そういうことがどういう結果に達し得るかということも、今日大きな実例となって、われわれの目の前にある。

これについては、あらゆる国々の教会において、根本的に考えられて然るべきであろう。しつかりした神学を持たぬ教会は、早晚必然的に異教的教会とならざるを得ないのである。ところで神学とは、何であろうか。この問いに対して、われわれは今、積極的な答えをさらに与えることを試みよう。

神学の課題とは、教会内の人々に――すなわち、説教者と会衆に、教会の生活と行為とは福音と律法の下に立つものであるということ、ここで神に聞かねばならぬということ、絶えず繰り返し想起させると

いうことである。

したがって、神学は、ここで神についてどのように語られるか、ここで何が「神」と名づけられるか、また何が神の意志・み業と呼ばれるかということを、吟味しなければならない。絶えず繰り返し脅威を与え、また実際に侵入して来る誤謬。教会が、過ち・迷い・罪を犯す人間の教会であるゆえに、教会の生活がさらされている誤謬。もしそれが教会内で支配的になれば、必然的に教会をして自己疎外せしめ、それを「味なき塩」たらしめる神学的誤謬。そのような誤謬に対して、神学は見張人の職務を果たさねばならない。……

K.バルト、公演『啓示・教会・神学』、著作集2、pp.287-9,新教出版

4

ˈ[ɣʌm lɑːfɪlɪhə/ rTɛsmi lɑːhTɑː !kə' Isaiah 45:15

誠にあなたは

隠されたる神

イスラエルのメシヤなる神

5 『聖書論』、日基督教団

「(旧約)聖書はすべて神の靈感によって記されたものである」が、原テキストはないし、異文資料もある。新約聖書においては、多数の写本が存在し、記者の理解も、聖書全体を通して存在する。

6 『聖書のよみかた』、「三つののみ」

7 『神聖書注解』、3